



江戸の子育てしぐさ

校長 益子 聡

江戸のおとなたちは、躰（しつけ）について

みっつこころ むっつしつけ このつことば じゅうにふみ じゅうごことわり すえきまる
〈三つ心 六つ躰 九つ言葉 十二文 十五理で末決まる〉

と言って、子どもを段階的に養い育てていく方法を考えて、今でいう全人教育を実践していました。

〈三つ心〉 — 3歳までは愛情豊かに育て、人に対する信頼感を植え付け、心の豊かさを教えなさい

人間は生まれた時には頭（脳）と体と心がつながっていません。心の豊かさや感性を磨き、頭・体・心をつないであげる。そのために、親は、子どもを抱きしめて愛情を注ぐ、美しいものや自然を見せて感性に訴える、手本となるしぐさを見せ、見よう見まねで子どもに覚えさせていくことなどが大切であるとされました。

〈六つ躰〉 — 6歳までに躰をしなさい

躰とはトレーニングのことで、繰り返し訓練を重ねることによって、人として身につけなければならない日常生活の振り舞い・作法を身につけさせることです。この時期の子どもには躰という一本の筋を入れるのに十分な柔軟性があります。そのために、親自身が、挨拶をする、席を譲る、お礼を言う、箸を使う、履物をそろえるなどの姿を繰り返し教えこみ、まねをさせました。

〈九つ言葉〉 — 9歳までに世辞が言えるようにしなさい

世辞はお世辞とは違い「今日は寒いですね」の挨拶のあとに「風邪などひかれていますか」と続けるなど、どんな人にも失礼にならない挨拶や、他人への口のきき方のこと。これを教えることが親の務めであり、家庭でできるようになっていなければ外でもできないと、繰り返し教えました。自分の言葉で話ができるように、親は子どもにいろいろ話しかけ、会話を通して語彙を増やし、言葉のつかい方を学ばせます。人様の前でも恥ずかしくない言葉遣いを覚えさせるのです。

〈十二文〉 — 12歳までに文字を自在にあやつり、きちんと中身が伝えられる文章が書けるようにしなさい

挨拶状・お礼状・お詫び状などにはそれぞれの季節の挨拶を入れてきちんと書くことが理想でした。親に何かがあってもすぐに後を継げるように、一家の主のかわりに注文書や請求書など、実用的な書類の作成まで求めていたようです。12歳ともなれば、ほとんど小さな大人として扱われました。

〈十五理で末決まる〉 — 15歳までに世の中の道理・経済・物理・科学など、一切の自然原理を理屈とか暗記ではなく実感として理解させなさい

15歳という年齢は今の中学3年生の年齢ですが、昔は15歳で元服、もう一人前の大人でした。最後の教えとして道理を説いて、子どもを独り立ちさせるのです。15歳にもなれば、あとは親の責任ではなく、その子自身の人生と認められていたのです。

“子育てしぐさ”には、現代の子育てのヒントが隠されていると思います。

家庭では、子どもが生まれてから独り立ちをするまで子育てが続きます。学校では、小学1年生から中学3年生までの義務教育9年間を一区切りとして、子どもたちに教え、育て、成長を預かります。

「3歳 → 6歳 → 9歳 → 12歳 → 15歳」という節目節目で

- ・ 今、子どもに何を教えて身につけさせるべきか
- ・ 江戸町民から学ぶ「心 → 躰 → 言葉 → 文 → 理」という躰の順番やタイミングを間違えていないか
- ・ 独り立ちを意識して子育てをしているか
- ・ 子育ての方針をみんなで共通理解できているのか

など、一度、学校・家庭・地域が立ち止まり、振り返り、しっかりと考えてみることは、価値があることだと思います。

あと1か月で「一年の計は元旦にあり」のお正月がやってきます。子どもを見つめながら、子育てのための一年の計を図ってみてはいかがでしょうか。